第３回

「伝統芸能にふれる－説経節・人形芝居・写し絵－」

平成11年（1999）

森鴎外の小説で有名な「山椒太夫」も、もとは説経節という浄瑠璃に似た中世から続く民衆芸能の物語でした。説経節は江戸時代から明治にかけて多摩に伝わり、50年ほど前までは人々に親しまれていました。第３回はこの説経節をめぐる伝統芸能を楽しむ講座。新国立劇場での観劇や直に三味線にふれる機会も設けました。

□第１講　６月27日(日)　説経節とは何か？　26
講師　秋谷　治（一橋大学教授）

□第２講　７月18日(日)　説経節をめぐる諸芸―人形芝居・写し絵―　27
講師　西角井　正大（実践女子大学教授）
山形　文雄
（劇団みんわ座代表、写し絵平成玉川文楽）

□第３講　８月12日(木)　平成玉川文楽復活披露公演　写し絵観劇会　29
（新国立劇場　午後６時30分開演）
山形　文雄「日本の伝統影絵芝居　写し絵」

□第４講　９月12日(日)　説経節〈五説経を中心に〉の物語　30
講師　岩崎　武夫（元千葉経済大学教授）

□第５講　10月10日(日)　多摩地域の説経節　31
講師　小澤　勝美（法政大学教授）

□第６講　11月21日(日)　説経節のいま・これから　33
講師　宮川　孝之（説経節の会会長）
実演　薩摩彦太夫（渡部　雅彦　説経節の会）
京屋　　波（赤羽　英子　説経節の会）

定員　70名
場所　多摩交流センター（第３講のみ新国立劇場）

平成11年6月27日　午後1時30分～3時30分

第1講　説経節とは何か？

秋谷　治（一橋大学教授）

第3回

1　由来

経典のなかの、譬喩、因縁、本生（ジヤータカ）、因果応報による教訓的な物語、仏の前生物語－修行、英雄譚

↓

＊説話文学

・『日本霊異記』『今昔物語』『三宝絵』』→唱導文芸へ

・曼陀羅、縁起→絵ときへ

・法談の説教

経典の解説、仏・仏像の由来、因果応報の例話、寺の縁起、高僧譚

→説教節へ

＊様々な漂泊の宗教家

高野聖、念仏聖、時宗（衆）、熊野比丘尼、巫女、御師、盲僧、山伏…

＊本地物（本地物語）

悲運にまみえた主人公（貴種流離譚）、艱難辛苦、苦難の過程を経て神仏に祀られる。…『神道集』―安居院流、『さんせう大夫』（与七郎正本）

＊平曲（声明）、幸若舞曲、浄瑠璃（小野お通）『浄瑠璃姫物語』

＊三味線

16世紀後半（永禄、天正）、琉球から蛇皮線が流入。三弦に沢住検校。平家と琵琶の如く、浄瑠璃に三味線を取り入れる（それ以前の楽器はささら）。

＊人形

傀儡、京都四条の河原

2　五説経

「苅萱（石童丸）」「さんせう大夫」「信徳丸」「愛護若」「小栗判官」「葛の葉」

説経とき（『日葡辞書』）

3　五説経の影響

＊苅萱（石童丸）

絵とき「御絵伝」（西光寺）

文楽「苅萱桑門筑紫轢」

「愛護若名歌勝関」（山の段）

滝沢馬琴「石童丸苅萱物語」

＊さんせう大夫

文楽「山椒大夫恋慕湊」「三荘大夫五人嬢」「由良湊千軒長者」

＊信徳丸

能「弱法師」、文楽「摂州合邦辻」、俊徳駅、俊徳道

＊愛護若

文楽「摂州合邦辻」、富本節「鈴曙恋観察」

＊小栗判官

近松門左衛門「当流小栗判官」、文楽「鬼鹿毛無佐志鐙」「小栗判官車街道」

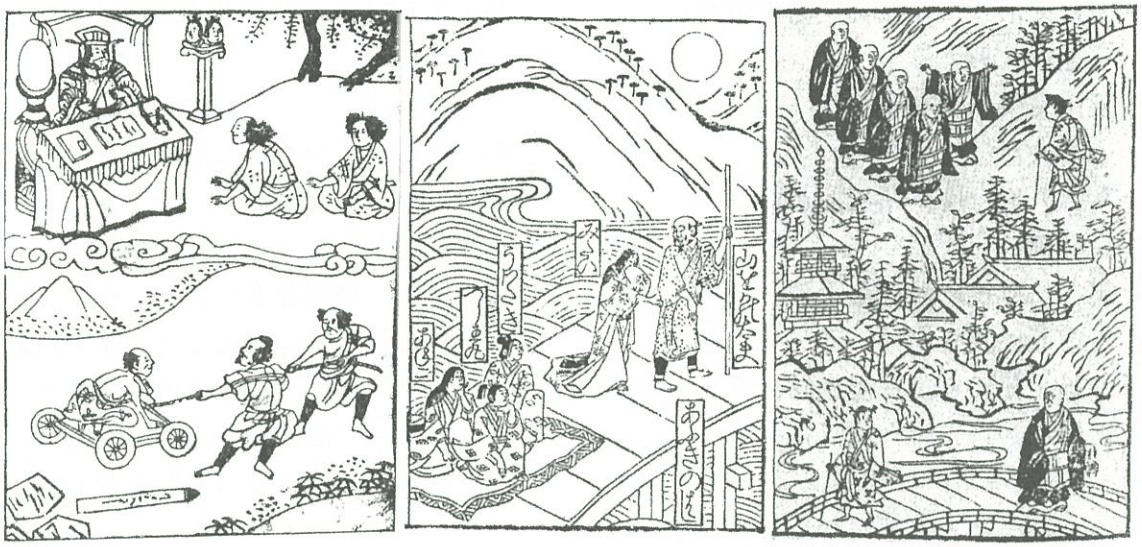
＊葛の葉（信田妻）

文楽「蘆屋道満大内鑑」、清元「保名」

4　薩摩若太夫と説経節

①初代薩摩若太夫

寛政年間堺町薩摩座で演じる。三代目に師事した若登太夫・佐登太夫→埼玉県横瀬町、横瀬の人形芝居



江戸時代の説経正本の挿絵、左から「小栗判官」「山椒太夫」「かるかや」（横山重編『説経正本集　第一・第二』より）

②六代目より西多摩と埼玉県（騎西町）の日暮龍トへ

5　薩摩若太夫の影響

＊写し絵

享和頃、都屋邦楽

玉川文楽、小林源次郎

→劇団みんわ座・山形文雄

＊車人形

初代西川古柳（山岸柳吉）。二代目より瀬沼家に代々引き継がれる。四代目柳峰。第五代　当代（瀬沼　亨）

＊横瀬の人形芝居、白久の串人形芝居

＊越後の瞽女唄「祭文松坂」

＊東北の語り物・九州の薩摩琵琶・筑前琵琶

＊藤沢の伝説、小田原の念仏唄＊

＊ヤンレ節、一ツトセ節

＊浪曲、江州音頭

平成11年7月18日　午後1時30分～3時30分

第2講　説経節をめぐる諸芸

―人形芝居・写し絵―

西角井正大（実践女子大学教授）
山形　文雄（劇団みんわ座代表、写し絵平成玉川文楽）

1部　説経節をめぐる諸芸―説経節と人形芝居―（講師　西角井正大）

1　説経節を地とする人形芝居

①現行の純説経節人形芝居

＊横瀬袱紗人形（埼玉県秩父郡横瀬町）

＊佐渡説経人形（新潟県佐渡郡新保村瓜生屋　広栄座）

②説経節も可とする現行の元説経節人形芝居

＊八王子車人形（八王子市下恩方）

＊竹間沢車人形（埼玉県入間郡三芳町竹間沢）

③復活し上演可能な説経節人形芝居

＊川野車人形（西多摩郡奥多摩町川野）

④廃絶した説経節人形芝居

＊飯富人形（千葉県袖ヶ浦市飯富）
→袱紗人形
＊玉川文楽（調布市）
→車人形
＊落合人形（埼玉県飯能市虎秀）
⑤説経源氏節人形
＊現行　原説経源氏節人形（広島県廿日市市原原眺楽座）
＊廃絶　甚目寺説経源氏節人形（愛知県海部郡甚目寺町今宿）復興可か？

2　現存説経節人形芝居の現行または残存床本数
＊横瀬袱紗人形…10
＊佐渡説経人形…14
＊八王子車人形…10ほか
＊竹間沢車人形…14
＊竹間沢車人形…10ほか
＊説経源氏節人形…８

3　映像資料―ＶＴＲ
＊薩摩派説経節　「葛の葉」二度目の子別れの段　昭和58年６月　国立劇場
＊八王子車人形　「大仏殿記」景清目玉献上の段　昭和47年６月　国立劇場
＊横瀬袱紗人形　「小栗判官実道記」親子対面判官矢取りの場　昭和48年６月　国立劇場
＊佐渡説経人形「熊野合戦」四天王奮戦の段　昭和47年６月　国立劇場
＊竹間沢車人形「佐倉義民伝」印旛沼吉高渡し場の段　平成９年５月　上福岡市福祉会館
＊説経源氏節人形「義民伝佐倉宗五郎」仕置申渡しの段　昭和54年11月　国立劇場

参考文献
永田衡吉著『改定日本の人形芝居』錦正社　1974年
桑山太市『新潟県民俗芸能誌』錦正社、1972年

２部　写し絵について（講師　山形文雄）

1　写し絵とは
享和３年、亀屋都楽によって考案。薄いガラスに絵を描いて映写フィルム（種板）とし、和紙（美濃紙）を貼り合わせたスクリーンに「風呂」と呼んだ幻灯機で映写、語りや音曲によって劇を演じた。

2　映像の特徴
複数の風呂を同時に映し、画面を作る。

3　種板、風呂について
絵…浮世絵師が種板を描いたものが多い。最初から色鮮やかに彩色。
動くからくり…種板は桐の板のガラス絵をはめたもの。映像を動かすからくりが施されていた。
風呂…木製、光源は灯油。抱えて操作することが出来、「からくり」と合わせ、映した人物を微妙に動かす表現を容易にした。

4　写し絵の歴史
劇として、噺家・説経節・義太夫節等で語られ、それに音曲がついた。「忠臣蔵」「番長皿屋敷」「勧進帳」「日高川入相花王」など文楽や歌舞伎の作品の多くを写し絵向きに直して演じた。日本に映画が輸入されるに及び、明治中期を最盛期として、写し絵は次第に凋落、大正末に活動の幕を閉じた。

5　玉川文楽の写し絵
初代玉川文楽…本名・薫森利三郎。文久元年（1861）、国領生まれ。17,8歳から説経節を習い、最初は車人形、その後、「写

し絵」を見て道具を仕入れる。八王子の「玉川文蝶」に入門。玉川文楽の名を貰い、写し絵師として国領近在を、車人形と一緒に回る。

絵師「二葉太夫」に自らが車人形でとったポーズをモチーフに種板を描かせた。関東一円で上演、名人の名を馳せた。

二代目文楽…初代の次男・薫森亮。初代の手伝いをしながら、写し絵と車人形を学んだ。

平成11年8月12日(木)　午後6時30分開演

第3講　平成玉川文楽復活披露公演　写し絵観劇会

劇団みんわ座

第3講は新国立劇場での写し絵観劇会となりました。

風土が記憶する文化　写し絵

山形　文雄（劇団みんわ座代表　平成玉川文楽）

驚くべきことが起きている。一度滅んだ芸能が長い休眠のあと目を覚まし、アイデンティティを主張して活動を開始した。芸能はこれまで長い歴史のなかで時代や風土の文化に根ざして生まれ、多くは消えていき、今では見ることも出来ないものが多い。

そして一度消えた芸能が復活することは希である。その希なことが三多摩に起きている。写し絵である。

写し絵は享和３年（1803）に始まり、終焉は昭和２年頃と思われる。

みんわ座が、写し絵の存在を知ったのは写真年鑑だった。実際の上演を見たわけではない。映像を生で操作するという、江戸時代の技術に惹かれて調査に取りかかったのだが、それでも年鑑の写真を手がかりに15年間、写し絵の調査と復元に関わった。

木製の幻灯器「風呂」やフィルムにあたるガラスに絵を描いた種板の復元は、時間のかかる作業だった。勢い経費も掛かる。文化助成の団体に、経済的応援を得ようとしても、「そんな古くさいものを観る人なんかいるんですか」と身の細る言葉が返ってくるばかりであった。それにもめげず、15年前に初演の幕を揚げた。

孤軍奮闘が長かったが、それがである。昨年秋、調布北高等学校で、生徒が写し絵上演に挑戦し、見事な成果をあげたと新聞で大きく報じられた。続いて12月、東京造形大学も八王子市郷土資料館で初演の幕を揚げた。

都下、あきる野市に、写し絵を演じるアマチュア劇団がある。

上方では、映像操作を同じくする類似の芸能「錦影絵」がある。大阪芸術大学の「池田教室」では、大学の授業で製作し、その上演は大阪の新聞に毎年賑々しく報道されている。

東京も大阪も、かつてその地にあった芸能である。昔は充分でなかった表現に必要な素材が現れると、それを得て新たな創造世界を切り開いて次々と登場してきた。そしてそれを成り立たせた文化伝統が、深層となっている文化の深さに感じ入るのである。

平成11年9月12日(日)　午後１時30分～３時30分

第４講　説経節〈五説経を中心に〉の物語

岩崎　武夫（元千葉経済大学教授）

1　物語としての説経節のモチーフ

＊残酷さ…「苅萱」はその典型

＊社会の最下層に生きる中世的な女性の無垢な愛情と、その精神的な強さが取り出され、形象化

…「山椒太夫」の安寿。「しんとく丸」の乙姫。小栗判官の照手姫など。

＊道行。道行を随所に使って物語の場を

移動。内容の暗さを払拭するような、独自のリズムと解放感があり、きき手（読み手）を楽しませる。
…「小栗判官」のなかで人買い商人に港から港へ売られ歩く照手姫の道行

2　正本系説経節（与七郎正本・佐渡七太夫正本）を対象に物語の構造についての考察
①場面と場面をつなぎ、ストーリーの連続性を意図した物語のタイプ
例）「苅萱」
②ストーリーの連続性はあるが、物語は前後２つに別れるタイプ
例）山椒太夫、しんとく丸、小栗判官
＊山椒太夫
前半―安寿中心の物語
後半―づし王中心の物語
＊しんとく丸
前半―しんとく丸中心の物語
後半―乙姫中心の物語
＊小栗判官
前半―貴種小栗の行動が物語の中心
後半―水仕照手の物語が中心

3　水上勉『説経節を読む』について
＊水上勉が幼年期の生活体験と京都の禅寺での幼童時代の体験を説経節の世界に重ね合わせて読み解く。
＊石童丸・づし王丸・しんとく丸への共感
＊幼年期に暮らした若狭の一寒村に存在した、芸人宿（瞽女・簓説経の聖・山伏祭文の語り手等）の阿弥陀堂（別屋という）の回想

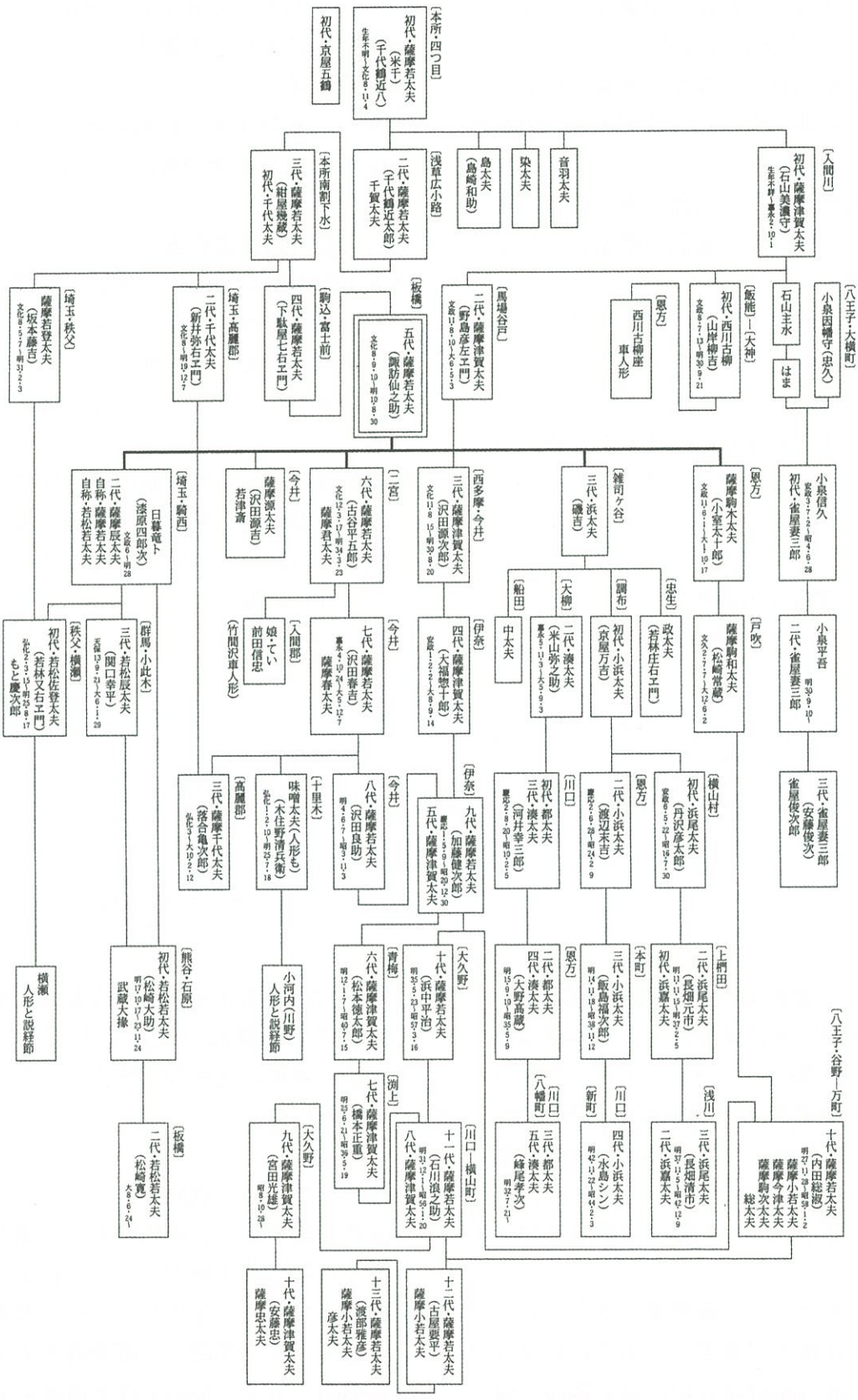
平成11年10月10日　午後１時30分～３時30分

第５講　多摩地域の説経節

小澤　勝美（法政大学教授）

1　六代目で薩摩派の中心勢力が多摩へ
寛政年間に初代薩摩若太夫（本所四つ目、千代鶴近八、一説に米千）が江戸堺町の薩摩座で説経の再興を果たす。六代目にいたって、西多摩二宮の神楽師・古谷平五郎が薩摩若太夫の家元を継ぎ、薩摩派の中心勢力は多摩地方に移った。
三代目若太夫が、薩摩座を地方を回ったことは極めて重要で、地方からみれば、一流の説経語りが、足を運んで説経を語り、指導もしてくれるメリットもあった。
多摩の二宮の神楽師であった古谷平五郎が六代目家元を継いだことも、単に古谷平五郎個人の実力だけではなく、多摩の農民の需要層の幅の広さをみることが出来る。

2　純粋かつ正当の説経節
五代目薩摩若太夫の門弟のうち重要なのは、初代薩摩駒木太夫と三代浜太夫の二人である。加住村上戸吹の薩摩駒和太夫（松崎常蔵）は薩摩駒木大夫の高弟の一人で、後の十代目薩摩若太夫（内田総淑）は駒和太夫の直系の弟子である。
大正13年５月22日に八王子大横町・平



多摩地方の説経浄瑠璃の系譜（八王子市郷土資料館編『特別展　写し絵・車人形・説経節』より転載）

音次郎宅で、坪内逍遙・三田村鳶魚・小田内通久らが上演を見て感銘を受け、正統の説経節に近いと折り紙をつけた。それは当時まだ薩摩駒次太夫であった内田総淑が語った説経であった。

当時は、初代若松若太夫（松崎大助）の改良説経が華々しく脚光を浴びていた。この中で八王子の薩摩駒次太夫（内田総淑）らの説経は周縁部の説経といってよかった。

3　二人の十代目薩摩若太夫、その後

西多摩の説経の系譜は、六代目薩摩若太夫（古谷平五郎）までは、薩摩派家元としての曲節的伝統を守っていた。八代目（沢田良助）以後、今井に存在する家元の一派は、義太夫説経と称せられる新派となり、正統派の八王子側と対立する。

昭和35,6年頃、八王子の内田総淑が保存会会長吉永卯助を訪れるようになり、町田佳声・宮尾しげを・本田安次らの推薦もあって、吉永は遂に十代目薩摩若太夫として認知するにいたった。ここに十代目薩摩若太夫が二人存在することになり、さらに十一代目は、西多摩の系統の浜中平治より八王子の石川浪之助に受け継がれた。また、八王子の十代目薩摩若太夫（内田総淑）に８年間習った故古屋要平氏に十二代目薩摩若太夫の家元名が追号として贈られた。

参考文献

『多摩のあゆみ』第57号　特集・多摩の伝統芸能　たましん地域文化財団　1989年

「多摩の歴史・文化・自然環境」研究会編『日本文化の伏流　民衆芸能　説経節集（CD・解説書）』　法政大学多摩地域社会研究センター　1998年

平成11年11月21日　午後１時30分～３時30分

第６講　説経節のいま・これから

宮川　孝之（説経節の会会長）
実演　薩摩彦太夫（渡部　雅彦　説経節の会）
京屋　　波（赤羽　英子　説経節の会）

1　現存する説経節

＊薩摩派①説経節の会
内田総淑（十代目）の芸を継承
＊薩摩派②
浜中平治（十代目）の芸を継承
＊川野　杉田芳春
＊秩父　若松多津太夫
＊若松派　若松若太夫
＊佐渡　霍間幸雄
＊説経源氏節①　眺楽座
＊説経源氏節②　もくもく座
＊説教節政太夫

2　座付きの説経節（説経・座名）

川野・川野車人形　秩父・横瀬人形芝居
佐渡・広栄座　説教源氏節・眺楽座
説教源氏節・もくもく座

3　各派の状況

＊薩摩派①説経節の会
農村の説経節１人、石川浪之助の弟子１人、内田総淑の弟子１人、他10人（三味線師匠１、大夫３〈修行中含む〉、

三味線方３、他３）

＊薩摩派②　浜中平治の弟子九代目薩摩津賀太夫（宮田光雄）

・10年ほど公演の機会なし。

＊川野

語り・杉田芳春、三味線・杉原太郎。現在では杉田氏の積極的な指導で川村博子をはじめ、島崎、吉野が舞台を勤める。

＊秩父

語り・若松武甲太夫、賀登太夫、辰太夫（多津太夫襲名予定）。三味線・京屋米子・敦子・麻希。ふくさ人形の人形遣いの座員15名から２名を選び語り手に回して特訓中。

＊若松派

平成11年現在三代目若松若太夫、由太夫、数年来の教室卒業者13人。平成11年10月26日　東京都無形文化財・二代目若松若太夫（本名・松崎寛）没。

＊佐渡

平成８年２月、霍間幸雄逝去。

＊説教源氏節①眺楽座

語り・築地一幸、三味線・藤村トヨ、平山和子、三味線修行中女性３人、語り修行中・津田和三（音頭・木遣）、山内まさゆき（音頭・木遣）、香川文信。代表長田龍太郎（人形遣い）。

＊説教源氏節②もくもく座

三味線の基礎を５人が身に付け、語りを交替制でやっている。

4　語りと三味線の練習法

＊三味線主導型

・甚目寺もくもく座

・説経節の会

＊分離型（語り手と三味線が別れる）

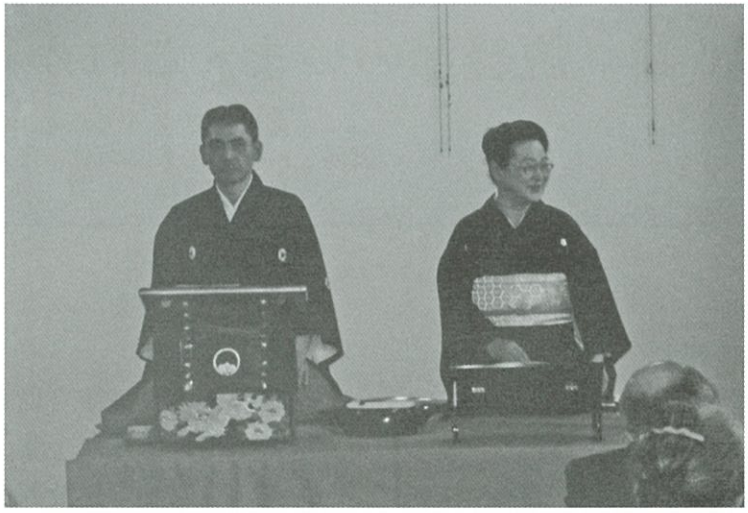
・川野

・眺楽座

・若松派

＊中間型

・秩父



第６講では説経節「小栗判官一代記　照手車引きの段」の実演も行いました。